Osaka University Knowledge Archive

Title	イギリスにおける健康・芸術的衣服同盟と芸術家たち : 機関誌「Aglaia」と「The Dress Review」より
Author(s)	鈴木, 桜子
Citation	デザイン理論. 2011, 57, p. 128-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53531
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

イギリスにおける健康・芸術的衣服同盟と芸術家たち
── 機関誌「Aglaia」と「The Dress Review」より ──

鈴木桜子／杉野服飾大学

はじめに

19世紀後半，イギリスで繰り広げられた「改良服運動」は，当時の流行の婦人服に対する健康・衛生面，機能・構造面，美的側面，そしてジェンダー的側面など，様々な視点と立場によって動機付けられた運動だった。特に1880年代には合理服協会（The Rational Dress Society），合理服会（The Rational Dress Association），合理服連合（The Rational Dress League）と組織名に「合理服」を冠したものが連続して設立され，フェミニズム志向の強い運動として活動した。それに対し，「健康・芸術的衣服同盟」（The Healthy & Artistic Dress Union，1890-1910c.?）は一連の改良服運動とは若干異なる方向性を示していく。それは美的側面をより追求していく運動として，ラファエル前派やアーツ・アンド・クラフツ運動と縁の深い芸術家たちとの関わりの中で推し進められたものであった。本研究発表では，健康・芸術的衣服同盟（以下，同盟）が近代衣服の成立過程において服装史，デザイン運動史の相関関係にあった点に着目し，同盟が発行した２つの機関誌から活動内容と改良服の試みについて明らかにしていった。

同盟と２つの機関誌

1890年に設立された同盟がいつまで続いたか確証できる記録は残されていないが，同盟の会長であった画家兼ガラス工芸デザイナーのヘンリー・ホリデイ（Henry Holiday, 1839-1927）の自伝によれば1910年頃まで続いたとされる。

同盟設立以前の1880年代，イギリスでは「健康」ブームがおこっていた。1884年にはロンドンで国際健康博覧会が開かれており，当時すでに改良服運動の組織による出品が注目されていた。開催期間中には建築家ゴドウィンの衣服に関する講演やウィリアム・モリスの織物に関する講演が行なわれ活気に満ち溢れていたという。同盟は，この「健康」に関心が集められていたことを背景に，組織名に健康的（healthy）という言葉を用い，また改良服を指すReform Dressや合理服を指すRational Dressを用いずに，芸術的衣服，つまりArtistic Dressという言葉を用いることで他との差異化を図ろうとした。

その健康・芸術的衣服とは，①女性の健康な身体とその自然の美しさをもとにあること　②美しい衣服は古代・中世の過去の時代の衣服に見出されること　③美しい衣服は居住空間との調和にあること　④芸術家は過去の大芸術家の作品，過去の衣装に学ぶこと，とされた。

同盟には２つの機関誌が刊行された。*Aglaia*（1893-1894，通巻３号）と*The Dress Review*（1902-1906?，通巻18号?）である。*Aglaia*が３号で廃刊になった背景には，同盟の会長となるH.ホリデイが機関誌の編集を殆ど一人で手がけ，本職と両立できなくなったことと，年２回の刊行では売店と契約できなかったことが要因としてあった。一旦廃刊になった同誌は約８年の空白を経て*The Dress Review*に誌名を変えて発行された。同誌はサイズを小さくし，年４回の刊行に増やしたが，その表紙はH.ホリデイがデ

ザインした *Aglaia* と全く同じであった。この表紙デザインに描かれたギリシャ神話に登場する三美神の姿は，コルセットを必要としない身体に自然に沿うドレープ豊かな衣服をまとった女神として象徴的に描かれたものであり，また，他の改良服運動の無味乾燥な機関誌と異なってグラフィック性を重視して描かれたものであった。

同誌の構成内容は，同盟の活動目的を掲げた上で，健康的衣服，芸術的衣服に関する論稿，委員会報告，展示会報告，衣服関連図書の紹介等であった。

同盟と芸術家たち

同盟の委員会メンバーには，医者，学者，芸術家とその夫人たちの名が連ねられ，芸術家たちの中にはH. ホリデイの他にルイーズ・ジョップリング，ヘイモ・ソーニクロフト，ウォルター・クレイン，他にG.F. ワッツ夫妻らがおり，機関誌やリーフレットには必ず彼らの名前が記載されていた。さらに機関誌に論考を寄せる会員には，上記メンバーの他にアーサー・リバティ，ジャネット・アシュビー，エセル・クーマラスワーミーなどがいた。

Aglaia と *The Dress Review* で提示された健康・芸術的衣服には２つの世紀を跨いでいることもあり若干の変遷が見られた。同盟発足時にはラファエル前派の絵画に見られた古代風，中世風の衣服表現から着想を得たものが多く，ドレープ豊かな女性服デザインがH. ホリデイやW. クレインによって手がけられた。それらの衣服はドレープそのものを装飾的要素として扱い，女性の身体の動きとプロポーションに合わされたもので，室内着や遊び着としてデザインされた。後に同盟の提案する衣服には手工芸的な要素が盛り込まれていく傾向が現れ，刺繍やアップリケが装飾的に施された。これはイギリスにおいて手工芸の復興を唱えるアーツ・アンド・クラフツ運動の流れと王立刺繍学校による芸術刺繍の推進があったことも考えられるだろう。衣服に刺繍が施されるのは当然考え得ることで，当時ニードルワークが家庭内でできる淑女の仕事として，また女性自身の衣服の問題とも重なって，芸術家やその周辺にいる女性たちの関心事としてあったのである。これらの女性服はフェミニズム志向の強い他の改良服運動と異なり，教養を持ち合わせ，家庭において室内空間との調和の中で存在する女性の姿として芸術家たちが示したものでもあった。

さいごに

同盟は芸術家やその周辺にいる女性たちによって関心が広められ，婦人雑誌においても活動の紹介がされる等ある程度の成果を示した。しかし服装やデザインの歴史を振り返った時，近代衣服としての評価はされていない。

19世紀末に設立された同盟は，ラファエル前派やアーツ・アンド・クラフツ運動が近代イギリスの社会問題の認識とその克服を試みた姿勢の下に衣服の問題を見出し解決しようとした。しかし衣服の問題として見た時，同盟の教条主義的な姿勢が衣服に対する個人的な趣味や趣向，生活の営みの多様性をも排除してしまう面を持ち合わせていたことは否めない。クチュール界から発信される「不健康で不自然に美しい」流行の衣服が非合理性の上に成り立ってきた経緯を見れば，道理に適っているかにみえる健康・芸術的衣服は，その非合理性の影に隠されていくことになったのである。